

【注意】発行当時の原稿をそのまま掲載しております。農薬について記載のある場合は、最新の農薬登録内容を確認し、それに基づいて農薬を使用して下さい。また、成果情報によっては、その後変更・廃止されたものがありますのでご注意下さい。

[成果情報名] 甚大な霜害を受けた渋柿の着果・新梢管理方法

[要 約] 渋柿で主芽枯死率が8割程度の甚大な霜害を受けた場合、主芽の新梢が強勢になりやすいため、通常より遅めに管理し、摘蕾（花）の際は1結果枝当たり2蕾（花）程度残し、新梢管理は6月下旬～7月上旬、7月下旬～8月上旬の2回に分けて実施する。摘果は7月下旬以降に実施し、1結果枝当たり1～2果の着果とすることで、正品収量が2割程度向上する。

[部 署] 山形県庄内総合支庁産業経済部農業技術普及課・産地研究室

[連絡先] TEL 0234-91-1250

[成果区分] 普

[キーワード] 渋柿、霜害、着果管理、新梢管理

[背景・ねらい]

令和3年4月10～11日の降霜により、庄内柿（渋柿）の芽枯れが発生し、一部地域では主芽枯死率8～10割と甚大な被害となり、早急な事後対策技術の検討が必要であった。そこで、甚大な被害が発生した圃場における正品収量確保のための新梢・着果管理方法について検討した。

[成果の内容・特徴]

- 1 展葉前に甚大な霜害を受けた渋柿は、枯死芽から新梢が発生しない欠損芽や副芽からの新梢発生が見られ、主芽の新梢は強勢になりやすい（図1）。
- 2 渋柿において主芽枯死率が8割程度の甚大な霜害を受けた場合は、以下のとおり事後の着果・新梢管理を行うことで、管理を省略した場合と比較して果実品質が向上し、正品収量は2割程度向上する（図2～4、表1）。
 - (1) 主芽の新梢生育および生理落果を抑えるため、通常より遅めに管理する。
 - (2) 摘蕾（花）は、新梢の伸長が停止する頃（6月）に実施し、1結果枝当たり2蕾（花）程度残す。
 - (3) 新梢管理は、6月下旬～7月上旬、7月下旬～8月上旬の2回に分けて実施する。
 - (4) 摘果は、1結果枝当たり1～2果の着果とし（図5）、奇形、変形等が判別できる7月下旬以降に行う。

[成果の活用面・留意点]

- 1 今回供試した8割程度の甚大な霜害とは、主芽が8割程度枯死し、枯死していない2割の一部に蕾が見られる程度の被害樹である。
- 2 霜害樹は、目通りの被害よりも上部の被害が軽度であることが多いため、被害が大きい場合でも上部の着蕾状況に留意する。
- 3 1回目の新梢管理では、生理落果防止を勘案し、時期が遅れないように留意する。
- 4 2回目の新梢管理の際は、次年度の結果枝確保を念頭に、混み合う部分の間引きも含めて実施する。
- 5 摘果時は、スレ、傷果等の原因になる不要な枝の間引きも併せて実施する。
- 6 1結果枝当たり2果の着果では、果実や枝等の隙間が狭く、収穫時にハサミ、枝等で傷果になりやすいため果実の取扱いに留意する。
- 7 本試験は砂丘未熟土、露地条件で「刀根早生」/共台、樹齢25年生（酒田市坂野辺新田）の樹を供試した。

[具体的なデータ]



主芽のみ発生

- ・欠損芽があるため発生本数が少ない(共通)。
- ・主芽の新梢は新梢停止が遅れ、強勢になりやすい。



主芽と副芽が発生

- ・副芽の新梢は葉が小さく、弱くなりやすい。
- ・主芽の新梢は葉が大きく、強勢になりやすい。






副芽のみ発生

- ・副芽の新梢は主芽より遅れて発生する。
- ・副芽の新梢は開花前に新梢停止し、細くなりやすい。

図1 展葉前に甚大な霜害を受けた渋柿の新梢生育 (R3年5月25日時点)

表1 8割程度の甚大な被害の管理方法 (R3年)

管理項目	摘蕾(花)	新梢管理	摘果
	6月	7月	8月
	通常より遅めで新梢停止の頃	通常より遅めで2回に分散	通常より遅めで奇形、変形が判別できる頃
管理のポイント	 <ul style="list-style-type: none"> ・蕾(花)が多い部分を摘蕾する ・違う方向の蕾を2個程度残す 	 <ul style="list-style-type: none"> ・通常より多く残す ・樹冠内部の徒長枝を間引く 	 <ul style="list-style-type: none"> ・奇形、変形果等を中心に摘果する。 ・着果が1果の場合は奇形果でも残す。

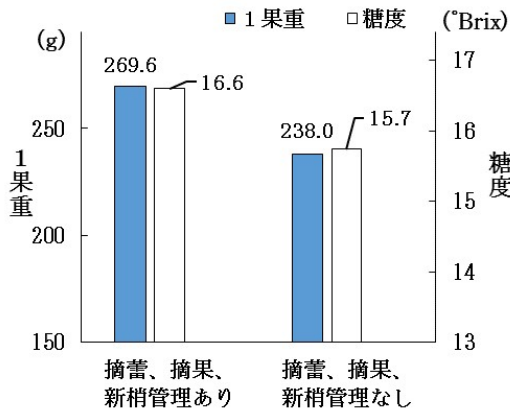


図2 事後管理の有無による果実品質の違い(R3)

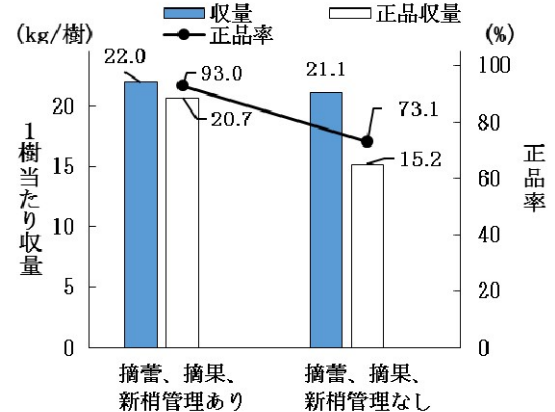


図3 事後管理の有無による収量と正品収量の違い(R3)

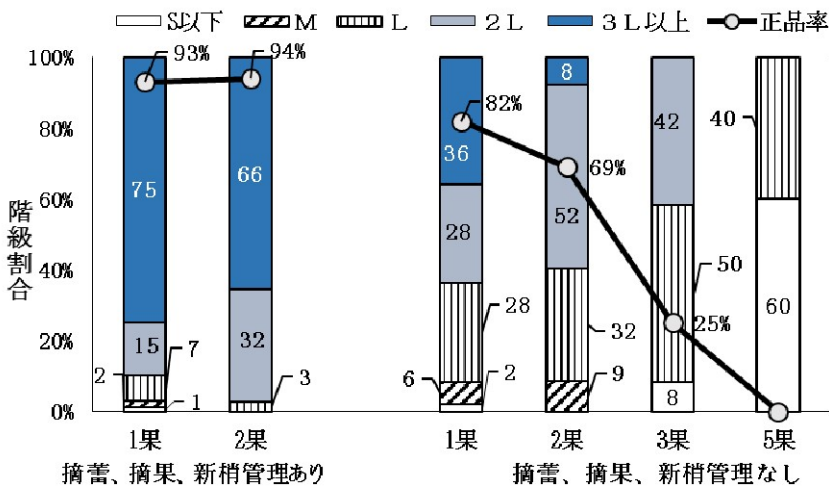


図4 結果枝当たり着果数別の正品率と階級割合(R3)



図5 結果枝当たり2果着果の状況 (9月24日、収穫始期)

[その他]

研究課題名: 庄内柿産地活性化プロジェクト事業

予算区分: 県単

研究期間: 令和3年度

研究担当者: 石川 妙、光月郁人

発表論文等: なし